

イチジクにおけるアザミウマ類の発消長および 果実内虫数と被害程度との関係

○城塚可奈子・磯部武志・三輪由佳・柴尾 学

大阪府立環境農林水産総合研究所

アザミウマ類はイチジクの果頂部が開く幼果期に果実内に侵入し、内部を褐変または腐敗させて商品価値を低下させる害虫である。被害果内部にはアザミウマ類の成幼虫が数頭～数十頭認められることがある。大阪府内の産地では近年、アザミウマ類の被害が多発しているが、ほ場でのアザミウマ類の発生実態および被害実態は十分には明らかにされていない。そこで、イチジク果実を加害するアザミウマ類の発消長と種構成を調査するとともに、果実内虫数と被害程度との関係を調査したので報告する。

=方法=

I. 粘着トラップによるアザミウマ類の誘殺消長と種構成

2013～2015 年の 5～8 月に研究所内のイチジクほ場で青色（2013～2015 年）および黄色（2015 年）の粘着トラップを各 2 枚設置して約 1 週間ごとに粘着トラップを回収し、誘殺されたアザミウマ類成虫数と種構成を調査した。誘殺種の同定は各調査日につき 100 個体とし、100 個体に満たない場合は全個体を同定した。

II. 果実内のアザミウマ類虫数と被害程度

2013～2015 年の 8 月に 3 回、研究所内のイチジクほ場から計 79～143 個の果実を採集し、果実内部のアザミウマ類の成幼虫数と種構成を調査するとともに、被害程度を 5 段階（0：果実断面の褐変面積割合が 0%、1：同 1～5%、2：同 6～25%、3：同 26～50%、4：同 51%～）で調査した。

=結果および考察=

I. 粘着トラップによるアザミウマ類の誘殺消長と種構成

アザミウマ類の誘殺成虫数は青色粘着トラップおよび黄色粘着トラップともに 5 月下旬～6 月中旬にピークが認められた。誘殺種の割合は、青色粘着トラップではネギアザミウマが 50～60%、ヒラズハナアザミウマが 35～45%、ハナアザミウマが 1～2%であり 3 年間で種構成はほぼ同じであった。黄色粘着トラップではネギアザミウマが 82%、ヒラズハナアザミウマが 9%、ハナアザミウマが 3 %であり、粘着トラップの色により誘殺種の構成が異なっていた。

II. 果実内のアザミウマ類虫数と被害程度

果実内部のアザミウマ類成幼虫数と被害程度との間には有意な正の相関が認められ、果実内虫数が多いと被害程度も高かった。果実内ではネギアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、ハナアザミウマが確認され、構成割合はそれぞれ 2013 年が 43%、15%、19%、2014 年が 53%、16%、22%、2015 年が 73%、6%、4%であった。2015 年のみの比較だが、果実内のアザミウマ類の種構成は黄色粘着トラップの種構成との類似度が高く、青色粘着トラップより黄色粘着トラップの方が、イチジク圃場でのアザミウマ類の被害をより適確に予測できる結果となった。

Seasonal fluctuation in trap catches of thrips in a fig field, and relationship between the densities of thrips in fruits and the damage index of fruits.

Kanako Shiotsuka, Takeshi Isobe, Yuka Miwa and Manabu Shibao

Research Institute of Environment, Agriculture and Fisheries, Osaka Prefecture